

---

# We Love Us

パウリの甥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

We Love Us

### 【Nコード】

N5403Z

### 【作者名】

パウリの甥

### 【あらすじ】

昔々に描いて、それ以来お蔵入りした恥ずかしい没ネタ……

二人の何気ないやり取りを素っ気なく書いたつもり……

(前書き)

こんな駄作を読んでもくださる皆様に、そして日頃私を支えてくれて  
いる雛花さん、雨宮さんに感謝を捧げたいです・・・ありがとう・  
・  
・

そう君と出会い、憎しみ、そして共に誓おう 永遠を・

二人分の荷物をいっしょに背負って、たとえ坂道であろうと断崖であらうと互いに支え合おう

悲しいことがあったらともに抱きしめよう、嬉しいことがあったらともに微笑み合おう

心細かったらともに手を繋ぎ合おう、困難に直面したらともに手を取り合おう

二人で同じ刻を刻み合えるこの今を感謝しよう……

We Love Us Act・1・0

午前7時前・・・カーテンの隙間から朝日がこぼれ、光が二人を柔らかく包む。  
いつもと同じ、だが毎回異なる逢瀬を夜ごと繰り返す・・・そんな日々  
横には、愛しい人が自分の、厚みのない胸にすり寄って安心しきった顔で眠っている。

この寝顔を手に入れる為なら・・・何もかも捨ててしまってもかまわない、本当に愛しき人・・・

気付かないうちに、彼女は眼を覚ましていたようだ。瞼が震えるように開く・・・2つの翡翠はまだ焦点が合っておらずその視線もどこか虚ろだ。淵には滴をたたえているその姿は普段のクールな姿とは一味違っていて、けど僕にしか見せない可愛い姿でもあるからとても嬉しく思う・・・

笑みを浮かべると、鼻をおもいきり抓まれた・・・

「全く、朝からにやけて・・・気持ち悪いわ」

これが、結構痛かったりするのだが……こういう所は容赦がない。

「おはよう……目が覚めたみたいだな」

「あなたって、悪趣味なのね？人の寝顔見るなんて……」

「何が？愛しき恋人の朝寝姿を見て何が悪い……。志保のこんな姿を見れるなんてオレだけじゃん」

「朝から、虫唾が走るキザなセリフをありがとう、ついでにいやらしく動き回ってる手をどかしてくれるかしら？」

「イヤっていったら？」

男の腕が、手が目的を持って 白き肢体を弄る……。互いの甘美なところは知り尽くしている……

五感が研ぎ澄まされ、官能が呼び起され……。エクスタシーが覚醒する……

だが、女はありたっけの理性を振り絞って厚くない胸を押し返した

「1週間、夜のオヤツ抜きと1ヶ月間食事をレーズンづくしにするけど？それとも新薬の被験者になってくれるかしら？」

「…………ケチ」

「はっ？」

「だってよくひさしぶりなんだぜ？こうして、志保と過ごすの……」

全く、この男は…………そんなこと言ったら、拒めないじゃないのよ

「そりゃ、お互い卒研・卒論も抱えてる上にどこぞやの推理フェチさんは事件となれば彼女のことは放置プレイ状態にして…………拳

句の果てには知らないところで一人ひっそり死ぬんだわ…………」

「ちよつと待て、オレは死なないしそもそも志保を一人にはしないぞ！」

「…………なによ、まだ結婚はしてないじゃない…………」

「いや、けど……………」

「…………じゃ、婚約はしないつもりなのね？」

「おいおい……………」

「冗談よ？・・・クスツ・・・本当にあなたはいつも私を飽きさせないわね」

「えっ」

「今みたいに、必死で焦ったような表情・・・」

「そりゃ、焦るだろうよ・・・だってよ・・・」

「時に見せる、いたずら小僧の様な小憎たらしい表情・・・」

「・・・なんか、ムカツクな・・・」

「そして・・・」

「うん？まだなんかあるのか？」

「真実を見抜いた時のその精悍な表情と澄み切った眼差し・・・」

「へ・・・」

「・・・私は、皮肉屋の天邪鬼・・・そして、死をもたらすT h a n t o u s . . . . .」

7

「・・・志保」

「時々、思っの」

「うん？」

「もし、私があの時ガス室でA P T Xの作用で死を迎えていたらって。今はこんな、震えるような幸せの中にいることができるけどそれは私の妄想なのかもしれないって・・・それに・・・」



まだ、彼女は過去の呪縛に捕らわれているのだろうか・・・彼女に付き纏っていた間も因縁ももう消え去ったというのに・・・

・・・けど・・・

・・・俺が、必ず守りぬく・・・

そして、幸せという名の光で包んでや

める・・・

ぎり取るう・・・

その光で、君が繋がれている闇の鎖をち



そう、自分で自分を愛せるために……

「志保……」

男は、その胸に抱くと折れそうなまでに細くて華奢な身体を自分の腕の中に閉ざす……その体も魂も零れ落ちない様にぎゅっと力を込めた……

「工藤君、・・・苦しいわ」

「光で包むから・・・」

「え？」

「お前を、光という名の幸福で包んでやるから・・・ずっと・・・」

「・・・私は、今のままでも震えるくらいに幸せよ・・・だから、さつき言った事なら「気にしないなんて、ゼッターできねーよ・・・」

「工藤君？」

「オレのことを一番知っているのがオメーであるように、オメーが一番知っているのがオレだからさ・・・」

「・・・確かにネガティブなことを言ったわ・・・けど、いつものことでしょうか？私、可愛げのない皮肉屋だから・・・」

「目」

「え？」

「オメ のポーカーフェイスは確かに見破ることは難しいさ。けど、オメ をずっと見てきて分かったことなんだけど感情ははつきりに現れるんだよ・・・その綺麗な瞳にな・・・」

「・・・」

「それと手」

「・・・」

「感情の起伏が激しいとすぐ掌を強く握るかもしくは、他人の手に

触れようとする」

本当に、この人には敵わない……けど落ち着く……

女は先までしていたしていたアンニュイな表情を消し、視線を宙に向ける。すると、急に男の形のいい唇を自分のそれで塞ぐ……

吸っては離れ、寄り戻しまた繰り返す……お互いのこころの残滓を交換する、感情の等価交換。

男はいきなりの行為に吃驚する。普段は人前でも手を繋ごうとせず、このような素肌のやり取りもこちらから提案しないとまくはいかない……決して自ら寄りつこうとはしない……まるで手負いの猫。なつくという概念は元から持たず、自らの生き方と信念に大きな矜持をもち厭くまでそれを貫こうとする気高さ……ただ、キスだけはいつも向こうから……そう、ファーストキスも彼女からだった。

一定のリズムではなく、お互いが慣れ親しんだリズムで奏でられたキスは何とも絶妙で……でも、そこにも彼女の如才がなくて火種が燻る一歩手前で、放された……

紅い舌で人の口を一舐めした後で……

「ぷつは、オイ！いきなりなにし」「工藤君。」「え？」

「あなたの推理はどれも正解だわ……流石は平成の、いやホームズそのものだわ」

「ハハハ……そりゃーお誉めの声にあずかり光栄で……けど、まだまだホームズの領域には達してはいないさ」

「いいえ、誰があなたはホームズ”並”の推理力を持ったっていつ言っただかしら？」

「オイ、それどういことだよ……じゃあ、何がホームズそのものなんだよ」

「そんなことにも気付かないのね……流石、ホームズさん。この調子じゃ何時まで経っても優作さんを超えるのは無理ね……」

「オイ、なんでそこで父さんの名前が出てくるんだよ？たたくという意味なんだよ……」



「まっいいわでも前言撤回・・・宿題にしろといて頂戴・・・その謎が解けるまで私に婚約なんて申し込まないでね」

「オイオイ、どういう意味だよそれ!? オレが何かしたのかよ?」

「かぐや姫」の一説は知っているわよね? 工藤君?」

「ああ、姫は求婚してくる男たちに様々な無理難題を押し付けるんだよな・・・そして誰もそれを達成することが出来なかった・・・」

「私、素直な女じゃないから・・・せめて、”謎”を解いてからにしてくれないかしら・・・これが、最後なぞのお願いだから・・・」

「志保・・・」

「じゃあ、起きましよう? もうお腹がすいたわ、工藤君は何がいいかしら・・・」

と行っていつもの彼女に戻るとシーツを巻きつけたまま、部屋を出て行ってしまった・・・

白の海に、男のみが残される・・・今しがた起きたことは何だったのだろうか？彼女は、自分を嫌いになってしまったのだろうか？いや違う、昨日だってあんなに煽情的で、小悪魔的な・・・

昨夜の光景に再び劣情が沸き上がりかけた頭を盛大に振って、殊博識でもあり女性を扱うにも長けている天然女たらし推理馬鹿は跳ね起きる。だが、どんなに聡明でも西に居る自分の色黒クローンよりも劣ってしまう”女”に関することだと其処らへんの小学生以下の持ち合わせしかないがため解答が出てこない・・・

ベッドの際に座り悶々とする・・・彼の有名な彫刻は、お決まりのポーズで地獄とは何かと壮大な哲学的命題を考えていたという・・・だが、この男は同様のポーズで”自分の彼女が出した命題”しほ なぞについて思案していた・・・

だーっ、分からねえ・・・全く！！なんでこんなことに・・・

ブー、ブー、ブー

「・・・うん？」

みるとサイドボードに置かれた自分の携帯が着信していた。表示を

見るとそこには 高木警部

と表示されていた。黒の携帯電話・・・ストラップにはメビウスの輪のレリーフあしらったもので裏には Shihoto Shiniichi と彫つてあるものだった・・・

隣にある緋色の色違いの携帯に一瞥送つては自分のモノを手にして、通話に答えるべく立ち上がる・・・

さて、熱いシャワーでも浴びて階下で志保によって作られた美味しく温かな朝食に舌鼓を打つて、いやその前に燻りかけたこの想いを沈めるために、“補給”をして・・・

それから・・・

「仕事にしますか!!」

これは、そんな彼と彼女とのありふれたけれどもその一日が無ければ成立しないお話・・・  
ピース

さあ、この”二人”はどんな物語を紡ぐのだろう？そしてどんな<sup>みらい</sup>絵を見せてくれるのだろう・・・

そんな、二人とその周りの人たちに今日も幸多からんことを・・・

a p p e n s n e x t , m a y b e .  
y o u w i s h ! ! Y o u c a n r e a d r e a d w h a t h  
I f y o u w a n t t o r e a d t h i s s t o r y ,

(後書き)

見切り発進してしまった自分に今更ながら後悔……

続きを書くのは今後考えてみます……やっぱり常口頃から書いている方々はすごい……頭さがる思いです……

本当は感想板の住人なので……

感想とか、ご意見、要望などなど待つてまゝ……

・ しかし、これR指定なのかX指定なのか自分でもよくわからん……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5403z/>

---

We Love Us

2011年12月18日04時48分発行